

エフェソからコリントへ

エフェソにおける三年にわたる伝道を終えて、使徒パウロはマケドニアに向けて出発した。マケドニア、アカヤを通過してエルサレムに行き、それから帝国の首都ローマに行き宣教するというのが彼の計画であった（19:21）。

今回のマケドニア、アカヤ旅行は、パウロにとっては二度目の訪問であったが、その大きな目的はコリント教会の諸問題を解決することにあった。コリント教会は賜物に恵まれた教会であったが、信仰的、教理的、道徳的諸問題をかかえ危機的状況にあり、パウロはエフェソにあつてそのため心をも痛め、手紙や使者によってその問題の解決のために心血を注いだが、事態は変わらないように見えた。

そこで（コリントの信徒への手紙によれば）パウロは事態収拾のためにテトスを送った。港町トロアスでテトスに会って報告を聞くつもりでいたが、いくら待ってもテトスが来ず、パウロはコリント教会のことが気がかりでトロアスでの伝道の機会も投げ打ってマケドニアに向かった（第2コリント 2:12、13）。マケドニアでパウロはようやくテトスに会った。そして彼から、コリント教会の状況が好転し、信徒たちが悔い改めの心をもって使徒パウロの到来を待っているという朗報を聞いて、大いに慰められ、安心した（第2コリント 7:5以下）。相当期間マケドニアで伝道した後、彼はギリシャに向かった。

三ヶ月にわたるギリシャ滞在を彼は主にコリントで過ごし、集中的にコリント教会を指導した。その期間に、彼はローマの信徒への手紙を書いたが、その中で、エルサレムの貧しい聖徒たちのためのマケドニアおよびコリント教会からの献金を携えてエルサレムに行こうとしていることを書いている（ローマ 15:25、第1コリント 16:1-4）。冬の嵐のシーズンがおさまって航海ができるようになると、パウロ一行はコリントの港町ケクレアイからエルサレムに向けて出発しようとした。ところが、パウロに反対をしてきた熱狂的ユダヤ教徒たちの彼に対する殺害の陰謀が起つたため、彼らはマケドニアを経由して帰ることにした。

フィリピでルカが加わり、そこから出帆して五日間かかってトロアスに着し、テモテら先発隊の七人と合流して、そこで七日間滞在した。トロアスにはすでに教会が存在していた。使徒言行録の著者ルカはそこでの集会で起つた一つのエピソードを紹介している（7-12節）。

このエピソードは、その頃、異邦人教会ではすでに「週の初めの日」すなわち日曜日に集会（礼拝）が行なわれていた貴重な記録である（第1コリント 16:2も参照）。人々は「パンを裂く」すなわち聖餐を守るために集まり、パウロの語る言葉に熱心に耳を傾けた。また、集会中、睡魔に襲われ、屋上の中から転落したエウティコという青年がパウロの手によって生き返つたという出来事は、会衆一同に神の臨在をひしひしと実感させた。彼らの信仰はそれによって大いに励まされた（12節の「慰められた」は「励まされた」の意）。

こうしてパウロ一行はトロアスを出発、異邦人教会からの愛の献金を携えて、海路エルサレムに向かった。五旬祭（ペンテコステ）の日にはエルサレムに着きたいという希望があつて彼らは旅を急いだ。パウロはエルサレムにおいて自分の身に危険が待ち構えていることを感じていたが、与えられた使命を果すためには命も惜しまないという決意をもって旅を続けた（20:22-24参照）。福音の使徒としてのパウロの信仰に私たちは深く心打たれる。